

日本レジャー・レクリエーション学会

第33回学会大会の開催にあたって

日本レジャー・レクリエーション学会
会長 松田 義幸

このたびの学会大会は、本会が日本学術会議登録後、初めて東北地区で開催するものです。開催校の東北福祉大学、そして宮城大学、仙台大学をはじめとする地元の大学関係者の協力のもとに、「世代間交流と地域文化」をテーマに、地元主導で企画、人選のプログラムを作ってくださいました。東北地区の大会にふさわしい内容になったと喜んでおります。ここまで労苦をおしまず、開催に向けて協力してこられた方々に、心から感謝申し上げます。

また昨年の大分大会から、本学会の研究交流を充実させようということで、3つのワークショップを立ちあげ、将来、本学会の分科会として通年の活動になることを期待しております。

第1のワークショップは「セラピューティック・レクリエーション」で、大学における研究と教育のあり方、福祉の現場の現状と課題をテーマに、対話を重ねることにしております。

第2のワークショップは、「景観・造園・環境」で、「多自然居住（田園居住）」、「ガーデンアイランド構想」など、21世紀の地方、地域の課題を念頭におきながら、先進事例を手懸りに対話を行ない、今後の方向性を探っていただきます。

第3のワークショップは、「レジャー・レクリエーション産業」で、バブル崩壊後、日本のリゾート、テーマパークはいずれも経営不振に陥っていますが、その中で唯一、成功をおさめている東京ディズニーランドを事例に取りあげ、そこからなにを学ぶことができるかを探っていただきます。

今年の学会大会の研究発表は、27課題で領域は多岐にわたっております。レジャー・レクリエーション研究はもとより学際研究、総合研究の性格をおびていますから、多岐にわたるのは自然なことなのですが、将来は会員の皆さまからの研究発表数を、現在よりもさらに多くなるように努力して参りたいと思います。

最後に、このたびの第33回学会大会を通じて、東北地区の本学会に対する関心の高まることを心から期待しております。